

▶ 消防団員セーフティ・ファーストエイド研修を実施して ◀

稲城市消防団

1. はじめに

稲城市は、東京都心の新宿から南西に約25キロメートルの南多摩地区東端に位置し、人口約9万人、面積17.97km²で、首都圏近郊の中でも里山風景の残る自然豊かな市です。特産品となる梨やブドウの栽培に力を入れており、市名を冠した「稲城」という梨は、生産量が少ないものの果汁が豊富で甘みも強く、シャキシャキとした食感もあり人気ですが、ほとんどが地域直売となるため、市場には出回らない幻の梨として有名です。

2. 消防団について

稲城市消防団は、大正3年設立の稲城村消防組を前身として、昭和23年7月に消防組織法が施行されたことに伴い、自治体消防としての稲城村消防団が発足しました。

その後、昭和46年11月には市制の施行に伴い、現在の稲城市消防団に改称され、現在は、団本部と8つの分団で組織され、定員207人となっています。

3. 消防団員セーフティ・ファーストエイド研修開催の経緯について

稲城市消防団では、消防団員の安全教育訓練を毎年開催しており、これまで実施した内容としては活動中の危険を予知する訓練や交通安全教育などがあります。

今年度は東京オリンピックを控え、警戒にあたる消防団員が負傷者を救護するうえでのB型肝炎ウイルス等への血液感染の防止策などの内容を検討していました（令和2年2月26日現在）。このような中で消防団員が救急隊到着までの間、自らの安全を確保したうえで必要な応急

手当などの活動を行うための手法や、被災者や現場活動をした消防団員のメンタルヘルスケアについて学ぶことを目的とした消防団員セーフティ・ファーストエイド研修の存在を知り、開催することとしました。

4. 研修の様子について

研修には当市消防団員75名が参加しました。講師には厚生労働省DMAT事務局局長の小井土先生、DMAT事務局隊員の小森先生、DPAT事務局隊員の河鳶先生にお越しいただいたほか、講師補助者として日本体育大学の救急救命士の皆様にもお手伝いいただきました。研修では災害医療概論の講義に始まり、災害時における応急手当の実習指導や災害時におけるメンタルヘルスケアについてご教示いただきました。

研修中、団員は傷病者の初期評価や活動場所



の安全確認について興味深く学んでおり、講師や救急救命士の方々に少人数単位で直接ご指導いただいたこともあり、内容を深く理解できました。



特に、エマージェンシー・バンテージについては、非常に便利で簡単だという声が上がっておりました。総合訓練では現場判断や行動指示など不測の事態が発生した際の初動対応から救急隊の要請、活動補助までを実践形式で実施しましたが、講師や救急救命士の皆様によるユーモアを交えた展示もあり、団員も負担なく実施できたため、楽しく盛り上がる場面もありました。

メンタルヘルスケアについては、普段はあまり触れることのない内容であったため、メモを取りながら興味深く聞いている団員の姿が多く見られました。



5. 研修を終えて

消防団員は火災だけでなく、地震や風水害などの大規模災害時にも活動するほか、警戒活動や救助、応急救護活動なども行っています。地域を守りたいという気持ちのほかに、何をすべきかを正しく判断できる知識と、活動を実践できる技術が必要であり、この研修ではその両方を学ぶことができました。

また、凄惨な現場に直面した際のメンタルヘルスケアについても、被災者だけでなく活動した団員にもストレスがかかることや被災者への声掛けや活動団員の振り返りだけでも心のケアになることを学びました。

消防団員も活動が終われば自分の日常に戻る必要があります。被災者を助けるための災害活動で自分たちが肉体的、精神的ダメージを受けることのないよう、今後も団員の安全確保を前



提とした活動を実施していきたいと思ひます。
最後になりますが、本研修を実施するに当たりお世話になつた講師の皆様、日本体育大学の

救急救命士の皆様、消防団員等公務災害補償等共済基金の皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

